

SSKP 船橋障害者自立生活センター

2014年5月

うえいぶニュース

74

〒273-0005 船橋市本町2-4-4 花島ビル1F TEL: 047-432-4554 / FAX: 047-432-4565
URL: <http://www.cil-funabashi.org/> E-Mail: cil-funabashi@cil-funabashi.org

定期総会のお知らせ

2014年度がスタートしました。何が変わる訳でもないのに年が変わったり、年度が変わったりすると何となく新しい気持ちになるのは人間の便利なところかもしれません。

いつも当センターの運営にご協力をいただきまして、ありがとうございます。

さて、今年度も定期総会を6月22日に中央公民館で開催することになりました。お陰様で私たちの活動も、いつの間にか四半世紀に近くなりました。しかしながら、脆弱な事務局体制、不安定な財政基盤、事業課題と運動目標の不明確さなど、組織としての根本的な問題は変わらない状態が続いています。

新しい2014年度は、相談支援事業の拡充とケア・ホームの開設に向けた動きを中心としたいと考えています。相談支援事業については、障害当事者の立場に立ったサービス利用計画を作成するという点で、ずっと続けてきたピア・カウンセリングやピア・サポートの精神が活かされると考えています。ケア・ホームの必要性については前号でも触れましたが、地域で生きることを望みながらもいろいろな不安があって実行に移せない人たちが多くいることを感じていて、そのような人たちの地域生活へのスタートラインとしての開設を夢見るようになりました。具体的には資金や建物、それに介助体制の問題など大きな問題がたくさんあり、運営についても克服すべき課題があると思います。それらの問題一つ一つに検討を加えて答えを探す作業から手を付けていきたいと思っています。

今回の総会では、組織問題を含めていろいろな問題について、皆様のご意見をお聞きしたいと思っています。さらに、2年に1度の役員改選の時期にもあたりますので、重要な総会になります。

お忙しいとは思いますが、ぜひ多くの皆さんに出席していただき、活発なご議論をお願いしたいと思います。

正会員の皆さんには、返信用の葉書を同封しましたので、必要事項をご記入の上、6月10日までにご返送いただきたいと思います。

記

日時：6月22日（日）午後1時半～4時

場所：船橋市中央公民館

代表のぼやき・・・

～「どーなってるの？」～



私が「二次障害」というものを自覚するようになって30年以上が経過しました。初めの症状は首の痛みでした。いくつかの病院を受診しましたが、いずれも湿布薬や痛み止めの薬が処方されるだけで、根本的な治療には至りませんでした。

やがて年月が過ぎて痛みは肩甲骨から背中全体に広がっていきました。電動車いすの運転操作も思うようにできなくなり、横断歩道の真ん中で立ち往生することもあって、「身の危険」を感じるようになりました。

ネットや口コミの情報を頼りに、M病院にたどり着いたのは十年前の真冬のことでした。その病院には、障害者施設で勤務した経験を持つ医師がいて、私と同じアテトーゼ（不随意運動）のある脳性マヒの人の頸椎の治療を手掛けている、という評判でした。レントゲンやMRIの画像を見た医師は「今の痛みはアテトーゼで無駄な力が入って頸椎の変形をきたしていることが原因」と即断し、結局それから約半年後に頸椎の変形を改善する手術を受けることになったのです。

その手術によって、痛みはほとんど感じなくなり、驚くほど楽になったのを覚えています。ところが、喜んだのも束の間、最近になってまたしても肩甲骨の痛みを感じるようになりました。加えて、手足のしびれも感じるようになってきました。

しかし、十年前に手術の執刀を担当した私の主治医は昨年秋に病気で急逝してしまいました。仕方なく？代わりの医師の診察を受けたのですが、その医師の判断で急遽検査入院をする羽目になり、検査の結果として、早めに再手術の要あり、という「恐ろしい診断」を下したのです。持ち帰って相談してから入院の時期を決めることにして、後日病院に連絡をすると、再手術を勧める「恐ろしい診断」を下した医師は、その診断から一週間後に病院を退職した、というのです。

さらに、「恐ろしい診断」を真に受けて、入院、そして再手術まで覚悟して改めて病院を訪れると、対応した若い医師は「判断が難しいので、部長がいる時に来てください」というだけで、片道3時間近くの道のりを帰ることになりました。いずれも、電話で診察の目的と趣旨を伝え、予約を取ったうえで遠路はるばる出かけているのですが、この対応にはちょっとびっくりです。やっと部長の診察にたどり着いたのは恐ろしい診断から3週間以上たった4月中旬のことでした。そこで、何と診断が覆ってしまったのです。

部長曰く、「たしかに頸椎の変形は見られるが、今すぐ手術をするのは時期尚早である」とのことです。なんとなくキツネにつままれたような気分が京浜急行とJRを乗り継いで帰ってきました。

・・・というわけで、私の治療はただいま執行猶予中ですが、問題は、二次障害について医療的な対応が確立されたとは言えない状況にあって、根本的な治療を受けにくいことにあると思います。M病院には私と同じような脳性マヒの人が日本中から来ていて、知り合いの人とばったり出会うことも少なくありません。他の病院では、なかなか手を付けていない治療法に手をつけて実績を積んでいるからだと思いますが、いつでも誰でも住み慣れた地域で、十分な医療が受けられる世の中になってほしいと思わざるをえません。

それにしても、半年も前に亡くなった私の主治医が、病棟のスタッフ紹介の写真の中で、にっこり笑っているのはどうしてでしょうか？

2014年度ピア・カウンセリング集中講座のお知らせ

船橋福祉相談協議会は、船橋市の委託により、障害の種類や程度に関わらず誰でも自分らしい生活が送れることを願って各種の相談に応じている団体です。

このたび、同協議会の主催により、「ピア・カウンセリング集中講座」を下記の要綱で開催いたします。今回の講座は皆さんの参加型講座にしていきます。心でピア・カウンセリングを感じて、基礎から学びます。すると、きっと日常生活の中で使えるようになるはずです。

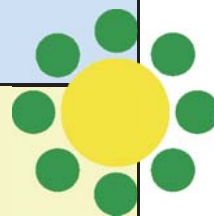
ぜひ、ゆったりとした気持ちで参加してくださいね。

開催要綱

- ☆主催：船橋福祉相談協議会
- ☆実施主体：特定非営利活動法人 船橋障害者自立生活センター
- ☆日程：7月18日（金）13:00 受け付け開始～17:00
7月19日（土）9:30～20:00（交流会を含む）
7月20日（日）9:30～12:00
- ☆会場：船橋市中央公民館（船橋市本町2-5-5 TEL：047-434-5551）
- ☆定員：8名（なお、締め切りは7月11日（金）先着順とさせていただきます）
- ☆参加資格：障害を持っている方（種類や程度は問いません）
- ☆参加費：無料（交流会以外の飲食費、宿泊費等は各自負担となります）
※ 宿泊について：宿泊をご希望の方は、別途お問い合わせ下さい。

2014年度ピア・カウンセリング集中講座プログラム

日付	時間	内容
7月18日（金）	13:30～13:45	オリエンテーション（さあ始めよう）
	13:45～14:20	自己紹介
	14:20～14:35	休憩
	14:35～15:30	リレーションを作る（仲良くなろう）・他己紹介
	15:30～15:45	休憩
	15:45～16:45	ピア・カウンセリングって何？
7月19日（土）	16:45～17:00	感想
7月19日（土）	9:30～9:45	new & goods（良いことあった？）
	9:45～12:00	障害について（できないことなかに？） ※随時休憩をいれる
	12:00～13:00	昼食・休憩
	13:00～15:00	人間の本質（皆が持っているもの）
	15:00～16:45	抑圧について（つらいことしゃべっちゃおう！）
	16:45～17:00	感想
7月20日（日）	18:00～20:00	交流会
	9:30～9:45	new & goods（良いことあった？）
	9:45～10:30	困った時はお互いさま（自立生活プログラム）
	10:30～10:45	休憩
	10:45～11:30	アプリケーション
11:30～12:00	全体の反省と感想	



<申し込み先・お問合せ先>

特定非営利活動法人 船橋障害者自立生活センター

〒273-0005 船橋市本町2-4-4 花鳥ビル1階

Tel：047-432-4554 Fax：047-432-4565

Eメール：cil-funabashi@cil-funabashi.org（担当：小林・杉井）

2014年度障害者ピア・サポーター養成研修講座を終えて 福祉作業所の職員である私の思い・・・



障害者福祉作業所 盛根

今回で第3回目の開講となった障害者ピア・サポーター養成研修講座は、船橋市中央公民館にて、3月6日～20日の毎週木曜日・全3回にわたり開催され、20名の受講生を迎えることができました。途中、体調により残念ながら出席できなくなった方もいましたが、最終的には18名の方にピア・サポーター研修の修了証明書が発行される運びとなりました。今回から県の委託事業として当センターが依頼を受けました。修了証明書は県から受講生の皆さんのお手元に届く予定です。この機関紙を読んでおられる頃には届いているかと思うのですが。

私は、自立生活センターが母体の福祉作業所で指導員の仕事に就いて2年目です。今回初めてピア・サポーター養成研修講座の準備に携わりました。受講生の募集から当日の受付等です。年明けすぐに所長より仕事の指示を受け、ピアサポのことに当初は全く関心もないまま「仕事だから、やるしかないか。」と準備を始めていきました。私はかなり不慣れな指導員で、ピアサポの仕事をする余裕がありませんでした。日々利用者の支援に満足できておらず、悩む日々。でもこの仕事が好きだし、そこに全力を注いでいるので、他の仕事に気持ちが入るわけがありませんでした。

しかし、作業所まで積極的に受講の申し込みに来てくれた方とお会いした時や、熱心な問い合わせの対応をしているうちに、仕事の意欲が徐々に湧いてきました。障がいのある方にとって必要な学びであり、私達にとってもやりがいのある事業なんだと思えてきました。

でも実際はかなり反省すべき点がありました。名札の名前の漢字が間違っていたり、手話通訳が必要な方から見えづらい席にしまったり、休憩が短すぎて疲れさせてしまったり、テキストの綴り方も良くなかったです。大変申し訳ありませんでした。

講座の内容については、今までいただいた感想の中に、とても共感できる内容がありました。施設にいる方で『ピア・サポーターという言葉自体知らなかった。障害者も様々な性格があり、どこまでが障害で、どこまでがその人の個性か見極めるのは容易でない。それと自分にも感情が当然あるので、それをうまくコントロールするのがピア・サポートの基本ではないか？相手の話を聞くのはいかに奥が深く、いかに相手の心に影響するか・・・』という内容。ホントに簡単じゃなさそうです。傾聴なんて言葉、軽く使えないなと痛感しました。今回の寺田講師の、傾聴の技法についての講座には驚きました。コミュニケーションを壊す12の型。毎日元気に、コミュニケーションを壊している自分に、気が付き愕然としました。これから学ぶことは山ほどありそうです。

最後になりましたが、悪天候の中、遠い他市より早起きして来られていたご夫妻、受講して下さったすべての皆様、この度は誠に有難うございました。心より感謝しております。

修了証書を手になされ、それぞれの地域でさらにご活躍をされることを願っております！！

～ 第3回障害者ピア・サポーター養成研修講座受講レポート ～ ピア・サポーターをやっていく上で気を付けること

濱屋敷 勉

私は身体障害者手帳を取得してからまだ1年足らずであり、障がいの内容も内部障害であるため、外見からも障がい者であることが分かり辛く、他の障がいをお持ちの方に比べるとあまり経験も苦勞もしていないように感じております。ただし、会社においては自分が障がいを持っていることを知っている人は直属の上司と人事担当部署だけと限られており、自分も障がいについて相談する相手がいないという現状に置かれています。

そこで、障がいを持っていること＝ピア（仲間）であるという考えのもと、カウンセラーとクライアントが対等な立場となつて、同じ境遇や背景を持って接していくことで、相手の手助けになることはもちろんのこと、自分も一緒になって勉強して成長できればと考え、ピア・サポーターになりたいと思った次第です。

まずは、今回の講義で教えていただいた各障がいの特性をよく理解した上で、クライアントの方が置かれている状況と目的を常に把握し、問題や課題があればそれを改善・解決できる一番有効な方法を考え、一緒になって取り組んでいけるようにしたいと思います。

そのためには、「傾聴」の技法が大変重要だと思います。傾聴をすることで、クライアントとの信頼関係を作るとともに、自分の中においても、クライアントが抱えている問題や課題などを整理して考えることができ、そしてクライアント自身が問題や課題を改善・解決できるように手助けを行うことを意識してやっていきたいと思います。

特に、「コミュニケーションを壊す12の型」については、普段、会話している中で無意識に使っていることが多かったように思えるので、ピア・サポーターとしてクライアントと話す際は、できるだけ使わないよう望みたいと思います。

また、クライアントが抱えている問題や課題は、自分ひとりで改善・解決できることは少ないと思うので、他のピア・サポーターや各行政機関及び専門の方等と十分に連携して対応していきたいと思います。

最後に、今後、もしピア・サポーターとして活動させていただけるならば、平常心でクライアントに寄り添い、傾聴することでクライアントに信頼され、「貴方に話を聴いてもらってよかった」と言われるようなピア・サポーターになりたいと思います。

秋山 巧

私は、クライアント一人一人をしっかりと分かるピア・サポーターになりたいと考えています。その中で、三つ気を付けたいと考えています。

一つ目は、クライアントの障害状況をしっかりと理解することです。自分は車椅子に乗っています。ですが、車椅子に乗っているから車椅子に乗っている人全てを理解できる訳ではありません。まして、視覚・聴覚・精神・知的・内部障害等の方は車椅子に乗っていない方が多いです。そんな方たちがクライアントとして相談に来た時に、クライアントに了解していただいたうえで障害のことも含めて話を聞きたいと考えています。

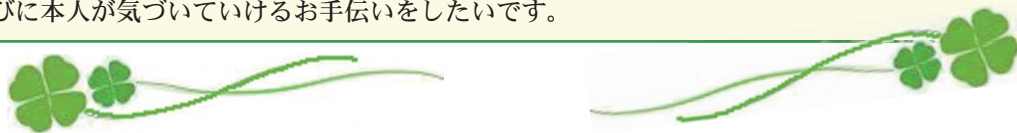
二つ目は、自分を抑えること。私は、自分を抑えることが苦手です。疑問に思ったことは聞きたいと思いますが、「この考えはこうではないのか？」と口にしてしまうこともあるかもしれません。クライアントは相談に来ていて、相談員である私が質問する側ではないと分かっているにもかかわらず、口に出そうになるので、気を付けていきたいと思います。

三つ目は、健康でいること。身体的にも、精神的にも健康でなければクライアントの話聞くことは可能かもしれませんが、いつか自分が限界を迎えてしまいます。クライアントのためにも、自分のためにも健康でいられるよう努力していきます。

研修で学んだことと自分が大切だと思ったことを胸に、活動をしていきたいと思っています。

高柳 律

私が、ピア・サポートをする上で気をつけたいことは、クライアントが出す答えを尊重し、正論を押し付けたくないことです。客観的に見てクライアントが出した結論が、自分のよかれと思った結論と違いがあっても、クライアントの出した結論を尊重したいと思います。カウンセラーの役割はクライアントの転ばぬ先の杖になることではないと思います。クライアントの生き方や価値観にまで口を出す権利はないと思います。もし、クライアントが望んだ結果にすぐに辿り着けなくても、遠回りすることによって、自分で選び責任を取ることの経験値は確実に貯まります。その機会を奪うことは、結果的にクライアントのためにならないのではと思います。クライアントが主体的に生きることを選択することを見守っていくことで、自身の本来持っている力や強みに注目していき、目先の辛さや苦しみにだけ囚われずに、困難を克服する喜びに本人が気づいていけるお手伝いをしたいです。



どんな点に注意して、どのようなピアサポーターになりたいか

松森 果林

私がピア・サポーターに興味を持ったのは、医療者や福祉関係者、あるいは行政などの専門家とは違い、「同じ体験を持っている仲間として」支援できるからだ。これは「障害」という自分ならではの体験を活かし、それを強みにしていけることでもある。

私は中途失聴である。小学高学年から、高校生にかけて人間として最も多感な時期に両耳とも失聴した。その現実を受け止め、聞こえない自分として新たな価値観や人生を築き上げるまでに長い時間がかかった。そうした体験をもとに、講演をすることが多い。講演を聞いた方からは聞こえにくさの悩みについて個人的に相談を受けることが増えてきた。もっとよく相手の話を聞き、うまく良い方向に向かっていけるように支援するにはどうすればよいのだろうか。そんな風に思っていた時、この講座があることを知った。

最終日は欠席せざるを得なかったが、全ての講義を通して多様な障害の特性について、傾聴の技法やピア・サポートの意義や心得などを学ぶことができた。

個人的に注意しなくてはならないと思ったのは、「必要以上に相手に感情移入しない」ということである。私は、人から相談を受けているといつの間にか感情移入してしまうことがある。そうすると、相手の苦しみがるで自分の苦しみのように感じ、辛くなってしまう。だから、ある程度の距離感を保ち、聞くことに徹することが大切だと教わった。そして自分自身もまた相談できる相手を作っておくことの必要性も学んだ。また、具体的な質問があったときには、医療従事者や福祉関係者などの専門家や行政の担当者に相談したり紹介することの必要性も学んだ。これは大きな収穫だったと思う。

現在日本では年間35,000人が突発性の難聴になり、このうち23,000人が治ることなく難聴者となっている。重度の聴覚障害者は、障害者手帳を取得して、様々な行政の支援サービスを受けることができるが、軽度～中度難聴者は受けることができない。そうした聞こえにくさに悩んでいる人が沢山いるなか、障害のこと、生活のこと、仕事のこと、家族のことなどに耳を傾けていきたい。

自分と同じ体験をした人と出会い、話を聴いてもらうことで、「困難に直面しているのは自分一人ではない」と、孤独感が和らぎ、安心感をもつことができるようなピア・サポーターを目指したいと思う。

ピア・サポーター養成研修講座を終えて

精神障害2級 鈴木 真由美

今回生まれて初めてピア・カウンセリング（カウンセラー、クライアント双方）を経験させていただきました。クライアントとして話を聞いていただいている時、どの方からも心地よい「安心感」を感じました。そして、ふと“自分が聞き手の時、相手に安心を感じてもらっているだろうか”と気に掛かりました。

「大切なのは、話し手にスッキリしてもらえる聞き方」

と傾聴の先生が仰っておられましたが、そのためには安心を感じてもらうことが大切な要素に思えました。

今回の経験を踏まえ、自分がピア・サポーターとして活動するにあたり、話し手の「不安」や「苦しい気持ち」が少しでも軽くなるようお手伝いできたなら… 話してもらっている時に安心を感じていただけたなら… 口で言うほどたやすくはないかもしれませんが、そういったピア・サポーターを目指していきたいです。



ピア・サポーター養成講座のお手伝いをしました

阿部正幸

こんにちは阿部です。今回ピア・サポーター養成講座のお手伝いとして、会場設営などを手伝わせていただきました。また、仕事の合間に講座の見学などをさせていただき、とても勉強になりました。

私は「障害者同士がカウンセラーになって利用者さんの相談に乗る。」というピア・サポーター養成講座の趣旨がすごくいいなと思っていて、自分の生活の中でのことを、プロの精神科のお医者さんとか、きちんと医療や福祉を勉強してきたソーシャルワーカーさんに相談する、というのももちろんいいのですが、同じ障害者だと、「幻聴が聞こえてつらい。」という話をするだけで、具体的なイメージを共有できるというのがいいな、と思えるのです。

中学時代、数学の時間で「マイナスとマイナスが合わさるとプラスになる。」という話を数学の先生がしていましたが、ピア・サポーターの活動のように、なにかを「できない」人同士で話し合うことで、新しい可能性が生まれてくるというのは、なにかわくわくすることじゃないか、と思います。ただし、「人の話を聞くというのはこんなにも難しいことなんだな」というのも、講師の先生の話を書く中で感じました。自分の考えを押し付けずに、そのまま相手のことを受け入れるというのはとても難しいと思います。

ただ、何にもしないで聞いていけばいいというものでもなく、やはり聞き手の個性というものも必要になってくることがあるのでは？とも思うのです。そういった視点から見ると、障害者が自らの人生を生きていくことそのものが学びであり、その体験を通して誰かとつながることが、誰かのためになりえるのだなと思います。

自分の苦労してきたことが、誰かにとっては貴重なヒントになる。そう思うと、聞き手の側にとっても、「自分の人生にも意味があった。」と感じられるようになるのでは？と思います。

作業の合間に

WAVEでは、私たちは名刺などの作成をしています。作業のあいまに手芸もしています。編み物でアクリルたわしなんかを作っています。専門の先生がいらしてくれたり、指導員の方、同じ仲間が教えてくれたりします。私は不器用ながらも気楽に取り組んでいます。作品には進化の過程が見て取られ、恥ずかしくもあります。最近はリリアンで組みひもを編んでいます。あいまに作るものなのですが、時間を無駄にすることなく、有意義に楽しく作品を作っています。

高橋悦子（WAVE利用者）



牛乳パックの箱づくり

初めは、カッターやハサミを使うことが難しかった。線を引いてカッターを四方に切る。和紙に糊を付ける。紙に貼る。四方、底、中の糊付けもなかなか思うようにいかず、糊がたくさん付いてしまったりしたが、数をたくさん作っていくうちに上手になってきた。

今は、ひと通り準備段階から自分一人のできるようになった。母親や妹に作ってあげると喜んでいた。

この小物入れや印鑑入れ等を市役所のカウンターに、置いて使ってくれと嬉しいです。

平野勝（WAVE利用者）



心の鍵

小島 純

私の一番好きな作家に、現ウクライナ（旧ロシア帝国）出身のニコライ・ゴーゴリがいる。彼は、彼の作品に触れることが、人間観や人生観が良き方向に変わる様な”心の鍵”の在処を探すきっかけになればと生涯を通じて願っていた。しかし彼の作品は、決して大上段に道徳を説くものでも、響めっ面で説教を垂れるものでもない。

その”心の鍵”は、全ての人類が遍く平等に持っているはずだというのが、彼の信念であった。極上の喜劇とも、悲劇ともとれるその傑作の数々は、時には歓迎され、またある時には嘲笑をもって迎えられた。

しかし、それは、ゴーゴリ自身が願っていた様な結果とはほど遠く、苦悩の果てに彼自身の人生も悲劇に終わる。

一年程前、私は自分のエゴイズムと独りよがりから、今まで真剣に人生における最低限の利美善すら探求してこなかった事がどうにも怖くなり、精神的に、1歩進めば奈落の地獄、下がってもまた同じという谷底状況に陥り、なんとかこの崖っぷちに吊り橋でいいから橋を架けよう。このままでは、万年悔いる事になると、今まで培ってきた技術や知識を生かしつつ、少しでも五体を使って必要としてくれる人の為に働こうと決意した。

不思議と、決意した時から、障害者と関わった経験がないにも係らず、障害者支援の仕事しか頭になく、そこから、精神の谷底に橋が架かって、前に進める様になった。

そして幸運にも求職者講座中に、つくば自立生活センターほにゃらの松岡功二さんからCILの存在を知る事ができ、なんとか日本のどこかのCILで働けないかと探していたところ、講座後半に、杉井和男さんを始めとする船橋障害者自立生活センターの方々と出会う事ができ、微力ながら決意を実践できるようになった。

障害で物理的な行動の制限を負いつつも、心が自由自在で、むしろ、そのハンディを他の障害者を助ける利他の行動に転じてゆく杉井さん達の精神に、自分は介助する以上のものを学ばせてもらっている。

そして、介助される立場と介助して報酬をもらうという従来の立場の違いを超えて、お互いに持っているものを出し合って、相互に補い合って生きていければ最高だと思う。

これからも、当センターでみつけた”心の鍵”を大切に、皆さんのお役に立てるように精進していきたい。

障害者相談支援業務にたずさわって！！ 障害者相談支援専門員として6ヶ月の今・・・

根岸皓子

私が長い間、行政や福祉施設に勤務している措置の時代の後、自立支援法が施行され、制度や名称等次々と変わってきた昨今、頭の中で整理するのが大変でした。

昨年、相談支援専門員の講習を受けに行き会場に入りきれない位の受講生がいたことに驚きました。一昨年より今回の受講申し込み者が多く、お断りしたと、県の職員の方がおっしゃっていました。研修はとても有意義でした。ただ講義を聴くだけでなく、実際にグループになって問題解決への話し合い等を行いました。2012年から3年間で、すべての障害者（児）のサービス利用計画書を作成することになり、実際にやってみて余りにも指定特定相談支援事業所の少ないのにはまた驚きです。（たくさんの事業所代表の方々が講習に来ていたのに・・・。）



相談者からは、「障害福祉課から書類が届き、指定特定相談支援事業所に電話をしても相談者がいっぱい受けられないという返事が返ってきて、ようやく最後に4ヶ所目でWAVEふなばしさんで受けていただけたので安心しました。」という言葉が聞かれました。またサービス利用計画書をたてても利用する施設がいっぱいと断られ、私達もなんとか探してあげなければとあせりを感じています。利用する方にとって、必要な時に必要な施設等の受け入れ体制がないということはこれからの課題です。サービス利用計画を立てるときは、本人の面談に家族の方に同行して頂き、今困っていること、家での接し方、話し方などのアドバイスをするだけでも喜んで下さいます。現在、相談にみえる方は精神障害者手帳をお持ちの方が3分の2位です。また、面談にみえた時と帰る時での表情が違い、笑顔が見られ、親子で「ありがとうございました。」という言葉을いただき、嬉しい気持ちでいっぱいです。これからは事業所同志の連携をはかり、ネットワークを広め、相談者が安心して地域で暮らし、健常者も障害者から学ばせて頂くことも大切なことと思っております。

「WAVEふなばし」に相談に行ってよかったと言われる相談支援専門員業務になるよう努力していきます。





松戸市長とぶなっしー

僕は、中学時代に統合失調症になり、中学時代はずっと家に引きこもっていました。幻聴妄想が怖くて、地域に住む人が全員自分のことを盗聴したり嫌がらせをしていると、当時は思っていました。



阿部正幸 自画像

外に出れない僕に、母は「少年ジャンプ」や

「少年サンデー」などのマンガ雑誌を買ってきてくれました。漠然と「漫画家になろうかな?」と思い始め、当時人気のあった「るろうに剣心」や「名探偵コナン」「犬夜叉」などの絵をまねて描いているうちに、絵がうまくなってきました。

その後、高校に入るころには薬の効果がでて外に出られるようになり、仕事も大学卒業後には普通にコンビニバイトや工場などで働けるようになり、いつしか漫画家の夢は忘れてしまいました。



似顔絵描いています

阿部正幸

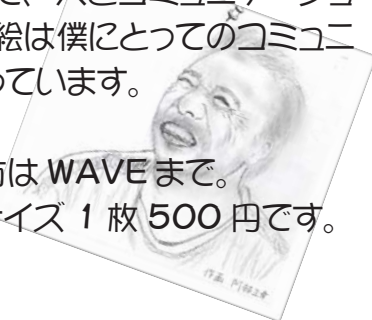
だいぶ大人になってから、友達の似顔絵とかを描いてその友達にプレゼントしたりするようになり、それで喜ばれることもしばしばありました。

WAVEで働くようになってから、船橋市の障害者作品展で「阿部君の似顔絵を売ろう。」と皆さんが言ってくださり、それが似顔絵師としてのデビュー（笑）です。



僕は口下手なので、人とうまくしゃべれません。でも似顔絵を描くことで、人とコミュニケーションがとれるので、似顔絵は僕にとってのコミュニケーションの道具になっています。

似顔絵に興味がある方はWAVEまで。鉛筆デッサンでA4サイズ1枚500円です。



老いのたわごと その4

平成の野辺送り

宮尾おさむ

ホームレス同然のAさんのことだ、いつものように家の中でゴロゴロしているだろうと思いながら行ってみると、昨日のことだがなんと外出の支度をしている。しかもそこにはAさんだけでなく、生活支援のヘルパーさんと、保護課の担当の人までいるではないか。

びっくりして何事かと聞くと、Aさん同様、やはりホームレスまがいの暮らしをしている昔から交友関係のあった男性が亡くなったので、これからその人の弔問に行くところだという。

「へえ。セレモに行くの」というと、

「よくわかんないけど、仲間が集まるからと、ウラの人から連絡があったんだ」と言ったので、私はまた驚いた。

“ウラ”というのは裏の社会、いわゆる組の人などのことだ。Aさんがそういう世界の人と関係があるのは知っていたが、今も付き合い合っているとは聞いてなかった。あまり信じたくなかったが、組の構成員にまでなってしまうのか？ 次々と疑問がわいてきたが、その間にも支度を済ますと、Aさんはヘルパーさんの車に乗って出かけてしまった。

春は人が死ぬ季節なのか。組の知人ではないが、私も三十年近い付き合いのあった友人が亡くなっている。障害者運動のリーダーだったKさんだ。

訃報は新聞の記事で知ったのだが、Kさんが病を抱えていることなどは、何年も前の顔を合わせているころから耳にしていた。だから決して意外な死ではなかった。むしろよくぞそこまでというのが実感であったが、それからしばらくして、今度は故人を偲ぶ形の報道があった。

全盲の視覚障害者だったこと。そういう障害者としては最初の高校教師であったこと。指導力があり、仲間の信頼もあって、リーダーとしても抜群の存在だった。そんなことが書かれてあったが、私が彼を知った昭和五十年代、Kさんは関わっていた組織の拡大を目指し、各地を回っていた。北陸地方の都市で大会を開くといって、参加を求められたのもその頃だ。

連絡案内によると、会場までは列車の駅の近くからローカル線の電鉄を利用するとなっている。しかし、いざ行ってみると、電車の影がない。今はライトレールと言って、こぎれいな路面電車が走っているようだが、当時は一両編成の旧式な車両だった。そのうえ街路も暗かったので線路があるのもわからなかった。

やっとその一両編成の電車に乗ると、乗客も10人といない。どこに行くのか心細くなったが、会場につくと壇上でだれかしゃべっている。それがKさんだった。

Kさんとは今に至るまで何回となくその後会っている。しかしKさんといえば、なぜかこの北陸のある市まで行ったときのことが、記憶に妙に残っている。電車の中から見えた窓の外の、ゆっくり流れていく暗い景色が、ぼんやりと出てくるのだ。

WAVEのうごき

1月

6日(月)	連合新春の集い
8日(水)	フェイス相談日
14日(火)	特別支援学校生徒実習
17日(金)	福祉職員勉強会
18日(土)	障害福祉団体連絡協議会
21日(火)	認定審査会
21日(火)	福祉まつり打ち合わせ
24日(金)	発達障害相談員フォローアップ研修
30日(木)	障害者計画策定委員会

2月

1日(土)	地域福祉連絡会
5日(水)	社協賀詞交換会
6日(木)	相談支援専門員スキルアップ研修
12日(水)	フェイス相談日
20日(木)	作業所運営委員会
22日(土)	障害福祉団体連絡協議会
24日(月)	職員会議
25日(火)	自立支援協議会・地域移行部会

3月

6日(木)	ピアサポーター養成研修
12日(水)	フェイス相談日
13日(木)	ピアサポーター養成研修
15日(土)	埼玉障害者センター見学
17日(月)	福祉相談協議会理事会
18日(火)	認定審査会
20日(木)	ピアサポーター養成研修
25日(火)	市集団指導
28日(金)	障害者計画策定委員会

4月

9日(水)	フェイス相談日
-------	---------

5月

9日(金)	fas-net 総会
14日(水)	フェイス相談日
14日(水)	認定審査会全体会
20日(火)	認定審査会
22日(木)	F a s - N e t 勉強会
24日(土)	福祉団体連絡会
31日(土)	自立生活センター理事会

会費納入のお願い

今年度の会費をまだお支払いいただけていない方、同封の振込用紙をご利用の上、お早めにご納入下さいますようお願いいたします。

年会費は、正会員が3,000円、賛助会員が5,000円、団体が10,000円となっております。

同封の振替用紙について

この機関紙には全員の方に郵便振替用紙を同封させていただきました。これは会費、介助料、カンパなどを送っていただく際に、便利のように同封したものです。

なお、納入状況など、ご不明な点は事務局までお問い合わせください。

編集後記

5月です。5月といえば5月病、…じゃなくて。早くも半年が過ぎようとしている、月日の経つのはなんと速いものよ、ということが言いたいのです。とくに年をとってくるとなおさらです。ところで年をとって困ることといえば体の動きが鈍くなる、物覚えが悪くなる、目がかすんだり疲れやすくなる等々…肉体的に関することが多く言われるような気がします。

しかし年を重ねることの本当の悲哀、それは自分を批判したり叱ったりしてくれる存在が周りにいなくなるのだと思います。その結果、自分の言動に対する反省心がなくなる。押し付けがましくなる。自分だけが他人を評価判断できる唯一の裁判官であるというような思い上がりに陥る。増長したり傲慢になってしまう。他人のいうことを聞かなくなる…。そんなクソじじいに私はなりたくない。

T 2

カンパのお礼

前号以降、以下の皆様より温かいカンパをいただきました。

厚くお礼申し上げます。（順不同）

竹本雅昭様 田尾幸三様

吉峯啓晴様 ヨゼフ会高木医院様

発行所 東京都世田谷区砧6-26-21
身体障害者定期刊行物協会
頒価 100円